

令和元年6月17日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16964

研究課題名（和文）“表現”と“信仰”の間にはいかなる関係があるのか？ 米国黒人キリスト教会の事例

研究課題名（英文）What is the relationship between "expression" and "belief"? case study of Black Christian churches in America

研究代表者

野澤 豊一（Nozawa, Toyochi）

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：80569351

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：米国の黒人教会は、礼拝儀礼において音楽を多用することでよく知られている。とりわけペンテコステ派ないしカリスマ派と呼ばれる宗派では、信者たちは忘我的なダンスや（「異言」と呼ばれる）忘我的な発話をしたり、「証し」や「祈り」などの発話を頻繁に行う。そうした礼拝儀礼はひどく騒がしいものである。本研究はそうした様々な行為がどのようなコミュニケーション機能をもつ「表現」なのかということ进行分析した。そのうえで、それらが個人の「信仰」を支えるという仮説をインタビューや観察によって得られた民族誌的なデータによって確かめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宗教的信念に限らず、様々なタイプのコミュニティへの所属意識がどのように形成されるのかというのは、学問的関心に限らない、私たちの社会における一般的かつ重要な問題である。本研究は、コミュニティのなかで個人の存在表明が発話や行為によって行われることが、個人の所属意識に大いに関連するというを示唆するものである。また本研究は、そうした表現が他者との相互作用のなかで促されながら表出するという、すなわち、他者や規則によって押し付けられる類のものでもないことを示唆している。

研究成果の概要（英文）：Black churches in America are well known for its use of music during the worship services. Especially in Pentecostal or Charismatic churches, congregations often do ecstatic dances, ecstatic utterance (called speaking in tongue), and verbal utterance such as “testimonies” and “prayer”. Their worship services are very noisy. In this study, I analyzed what kind of “expressions” those actions are, in terms of communicative function. Also, I confirmed an assumption that those expressions can well support individuals “belief” by ethnographic data collected by interviews and observations.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 民族誌 ペンテコステ派／カリスマ派 アフリカ系アメリカ人 発話 パフォーマンス
音楽 ミュージッキング

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀の半ば以降、急速な勢いで世界中に広がりつつあるペンテコステ/カリスマ派のキリスト教は、大衆文化と相互作用をもちつつ発展してきた、ポストモダンを代表する宗教現象のひとつである。その特徴には、大音量で演奏される音楽や会衆歌、パフォーマンス的要素の多い牧師の説教とそれに対する信者の熱狂的反応、聖霊によって引き起こされるといふ忘我的な発話やダンスなどがある。本研究ではこれらを端的に“表現”と呼ぶが、ペンテコステ/カリスマ派が主流派キリスト教や大衆文化にまで影響力をもった最大の理由のひとつに、この表現の過剰さがある。

(2) 研究代表者はこれまで、黒人ゴスペル音楽への関心を入り口に、この現象に「音楽」と「ダンス」という側面から接近してきたが、歌い踊ることは、礼拝儀礼における表現行為の一部にすぎない。たとえば、牧師の説教に応えるさまざまな身ぶりや発話、平信徒が会衆を前に行う「証し testimony」、定型的な発話を組み合わせた「祈り」、無意味な音の羅列による「異言(いげん)」など、信徒らが礼拝儀礼のなかで行う表現行為は多岐にわたる。黒人ペンテコステ/カリスマ派教会の礼拝儀礼は、これらの発話、身体動作、音楽が入り混じる場であるだけでなく、研究代表者はこれまでの調査から、これらの表現行為を信者同士のあいだで堂々とする行為が、個々の信者の信仰心を確固たるものにするという仮説を得ていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、「歌うこと」と「踊ること」、それに「語ること」が黒人ペンテコステ/カリスマ派のキリスト教信者にとってもちうる意味を明らかにすることによって、1-(2)で提示した仮説を検証することである。換言すれば、ペンテコステ/カリスマ派における宗教的な“表現”と“信仰”との間の関係を明らかにすることである。

(2) とりわけ注目するのは、礼拝儀礼で頻繁に行われる「証し」「祈り」「異言」という言語的な表現行為がもつコミュニケーション機能である。そのため本研究では、言語テキストだけでなく、(アクセントや力強さといった)発話の意味作用を行わない側面にも注意を払うことを目指した。また本研究では、信者たちの「回心の語り」を収集することによって、これらの言語的表現行為が信者にとってどのような意味をもつかを明らかにすることを目指した。

(3) また本研究は、「信念」によって“行為”が生み出される」という、粗雑な心身二元論と因果論に基づく素朴な想定を乗り越えるためにも着想された。すなわち、「表現行為が人間にもたらしうる帰属意識」という、人文学一般に拡張可能なテーマを念頭においたものである。

3. 研究の方法

(1) 研究の主な方法は、米国ミズーリ州セントルイス市を中心としたフィールドワーク(現地調査)である。旧奴隷州に属するセントルイスは(いわゆる南部連合には属さないが)黒人人口が多く、20世紀の半ば以降の産業の空洞化と貧困層の増加もあって、ペンテコステ/カリスマ派のキリスト教会が大変多い。そのなかでも、研究代表者が十数年来にわたって関係を築いてきた2つのキリスト教会(小規模な古典的ペンテコステ派教会と、中規模なカリスマ派教会)において調査を行った。これにより、宗派や規模の多様性を視野に入れた調査データを収集することを期待した。

(2) 本研究の具体的方法の一つは、礼拝儀礼における言語的表現行為の事例収集および分析である。特に対象としたのは「証し」「祈り」「異言」であり、これらを映像や音声データで記録した。その際には、言語的な側面だけではなく、非言語的な側面(語調、身振り、発話の物理的セッティングなど)も記録できるように注意した。

(3) 本研究の具体的方法のもう一つは、回心体験の語りの収集である。「新生 born again」を重視するペンテコステ/カリスマ派の信者にとって、回心体験は豊かな民族誌的データの宝庫であると思われる。本研究における関心からは、宗教的な表現行為にいかにか動機づけられたり、あるいは躊躇させられたりしたのかという点が興味深い。

4. 研究成果

(1) 当初の目的であった「証し」「祈り」「異言」の映像データを集めることは、今回の調査機関では困難を極めた。というのも、研究代表者がこれまで信頼関係を築いてきた2つのキリスト教会のいずれもが、牧師の代替わりに端を発した転換期にあり、信者の数を大幅に減らし、そのぶん礼拝儀礼が不活発になっていたからである。(礼拝儀礼の撮影には長年の通い調査による信頼関係が不可欠である。)ただし、これは宗教空間の流動化という現代アメリカの状況をよく反映したものであるという点で興味深いことでもあった。教会に残った人々がそれぞれどのように窮状に対処したり、どのような展望をもっているのかという点についても、インタビュー等によって明らかにすることができた。

(2)(1)で述べた理由から発話に関する新たな映像データはごくわずかにとどまったが、過去の映像データも活用して分析を行った。発話行為の予備的な分析からわかったことは次のことである。まず、礼拝儀礼における宗教的発話を以下のように分類した。

表：発話のタイプ分け

	言語的意味の有無	定型化の度合い	発話の向かう先
説教	有り	低い～高い	語り手 会衆
証し	有り	やや低い(幅あり)	語り手 会衆
祈り	基本的に有り	かなり高い	語り手 神(会衆～語り手自身)
異言	無し	きわめて高い	語り手 会衆～語り手自身
歌唱	有り	きわめて高い	歌い手 会衆～歌い手自身

ここで着目したいのは「定型化の度合い」であり、それが発話の「雄弁さ」「よどみのなさ」を保証するという点である。キリスト教会における信者の発話行為を「実践コミュニティ」理論から考えると、礼拝儀礼の中で雄弁に発話できることが一人の信者を教会の正当なメンバーとして位置付けることは理解できる。問題は、その雄弁さが宗教的実存に重要な意味を持つという点である。ここを掘り下げるにはさらなる研究を積まなければならない。

(3) 黒人ペンテコステ派教会では、まれに「悪魔祓い」が行われることがある。今回の調査期間中に一つの事例を見聞き、またそれに関する聞き取りを行うことができた。そこからわかったのは、「悪魔」が特定され、それを「祓う」に至るまでのプロセスがきわめてプリコラージュ的であるということである。また、その過程がすぐれて「表現」的な身振りや発話、音楽なしに成立しえないということが確認された。

(4) 2014年、セントルイス郊外のファーガソンで起こった黒人青年射殺事件とその後の暴動やデモ、さらにはそれが引き金となって全米に飛び火した一連のデモに対する民衆的な黒人教会およびその信者たちの反応は興味深いものであった。この動きを人種闘争としてみると「黒人」教会はデモ側につくものと考えられそうであるが、実際にそうしたスタンスをとった教会や牧師はきわめて少なかった。その背景には、教会という場で政治的アジェンダを表面化させづらいいくつかの事情がある。これは、当初計画していなかった成果の一つである。

(5) 米国滞在中に、アラバマ州バーミングハム市において、これまで良好な関係を築きつつも集中的に調査する機会をもつてこなかった黒人バプティスト教会(およびその主要なメンバーが属する一族)を訪問した。今回改めてコネクションを確認して、近い将来に調査のために再訪する意図を伝えるにいたったことで、都市的なペンテコステ派教会と郊外の伝統的なバプティスト派教会という、興味深い比較研究の可能性が見えてきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 3件)

野澤 豊一「アメリカ黒人ペンテコステ派教会における悪魔祓い」『宗教と社会』学会、2018年6月9日、帝京科学大学、千住キャンパス。

野澤 豊一「「信じている」と語り歌うこと 黒人ペンテコステ派キリスト教におけるオラリティと信仰」『公開シンポジウム「オラリティを捉え返す ミュージッキングと語り」の間から』、2018年1月27日、国立民族学博物館。

野澤 豊一「かれら/私たちは音楽のパワーを借りて何をしているのか? 文化人類学的フィールドから考える」(招待講演) シンポジウム「コトとしての音楽を考える 出来事・参与・対話からのアプローチ」『音楽と社会』研究会、2017年2月12日、立命館大学・衣笠キャンパス。

〔図書〕(計 0件)

〔その他〕

野澤 豊一「フィールドでパフォーマーになるという経験から ミュージッキングにおける「参与」」『民博通信』No.161、国立民族学博物館、2018年、pp.18-19。

<http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/research/activity/publication/periodical/tsushin/pdf/tsushin161-06.pdf>

野澤 豊一「ミュージッキング研究の挑戦 「音楽」のリアルな姿に迫るために」『民博通信』No.157、国立民族学博物館、2017年、pp.14-15。
<http://doi.org/10.15021/0008478>
富山大学文化人類学研究室ホームページ
<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/bunjin/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。